

日本語パートナー座談会報告書

1. 山梨市日本語パートナー座談会

1) 概要

開催日時	令和3年1月17日 13:00～14:00
開催場所	山梨市市民会館 4階 404会議室
開催目的	1) 地域日本語教室に日本語パートナー（日本語学習支援者）として携わる中で感じていることや不安、抱えている問題点を共有、解決し心理的負担を軽減する。 2) 学習支援や学習者とのかわりにおいて困難さを感じている事柄を共有。講師によるアドバイスやパートナーの成功体験などを今後の学習者支援の助けにする。 3) 教室運営における改善点の早期発見につなげる。
参加者	山梨市日本語パートナー：藤岡 志野氏、青柳美夢氏 教室講師：小林信子講師 山梨市担当者：西室羽純主任（山梨市役所地域資源開発課） 山梨県地域日本語教育コーディネーター：古屋玲子

2) 質問項目と主な発言内容

①日本語パートナー参加について

Q：日本語パートナーに応募した動機

A：留学経験から学校外で生きた言葉を学んできた。学校外において言語や人との接点が大事だと感じた実体験があり、それが山梨市の在住外国人のために何かできるのではないかと思ったのがきっかけ。

A：ボランティアに参加したかった。また、大学で日本語教師養成課程を受講中。実際の授業風景を見るチャンスがないので参加して授業の様子を見てみたかった。

Q：実際の授業を見た印象は

A：非常に活発。発話も多く、学習者がわからないことを積極的に聞いてくることにも驚いている。

Q：日本語パートナーに参加する前と後で自身の考え方に変化があったか

A：参加する前はこんなに学習者と話をする機会が多い教室だと思っていなかった。学校の勉強はコミュニケーションが一方的になりがち。学習者とコミュニケーションする中で、コミュニケーションとは話だけでなく聞く側としての役割の大切さを感じた。

A：週1回、2時間で日本語を習得するのは大変だと感じた。課外活動として何かできることがあるといいと思う。

Q：例えば、どのような活動があるといいと思うか

A：日本に住み続けたいと思えるような継続性がある動きがあるのが望ましい。文化的催しが少ないように感じる。まずは、参加できる、集まる理由づくりが大事なのでは。

A：山梨市は国際交流や文化交流が比較的多い地域でもある。在住外国人にも参加してもらうためには周知の有効性についても検討課題。

②学習者支援で困っていることについて

Q：学習者支援する上で困っていることは

A：特にない。

A：日本語についての質問をされた場合にどう説明すればいいかわからないことがある。例えば日本語の成り立ちから話したほうがいいのかなど。

③その他

Q: 支援者として受けてみたいサポートがあるか

A: 学習者の日本語レベルが異なる状態でクラスを運営するには今の形態が最良だと思う。今後も長期的に継続されることを願っている。

A: 日本語パートナーの募集コンテンツについて、効果が上がっているか疑問に感じる。ボランティアとして協力したい人がその機会を失わないためにも効果的な募集方法を考えたほうがいいと思う。

2. 笛吹市日本語パートナー座談会

1) 概要

開催日時	令和3年1月23日 11:00～12:30
開催場所	笛吹市役所市民窓口館 3階会議室
開催目的	1) 地域日本語教室に日本語パートナー（日本語学習支援者）として携わる中で感じていることや不安、抱えている問題点を共有、解決し心理的負担を軽減する。 2) 学習支援や学習者とのかわりにおいて困難さを感じている事柄を共有。講師によるアドバイスやパートナーの成功体験などを今後の学習者支援の助けにする。 3) 教室運営における改善点の早期発見につなげる。
参加者	山梨市日本語パートナー：向山和美氏、長田和美氏、宮川みち子氏、萩原真澄氏 武居かおり氏、小室信弘氏、赤岡直人氏、若杉銀子氏 NGYEN THI HONG YEN 氏 教室講師：武川夢見子講師、杏掛大地講師 笛吹市担当者：宮澤まな美主幹（笛吹市役所市民環境部） 山梨県地域日本語教育コーディネーター：古屋玲子

2) 質問項目と主な発言内容

①日本語パートナー参加について

Q: 日本語パートナーに応募した動機

A: 日本語教室を目指している。（2名）

実技を学びたいと思い応募した。大変勉強になっている。

A: 山梨日本語ボランティアの会に所属している。自分のスキルアップのために応募した。生活や日本文化についてどのように教えていったらいいかわからない。この教室を通じて勉強したい。

A: 広報を見て協力したいと思った。

A: ベトナムから来日し、日本語の必要性和難しさを感じた。自分が経験したことを活かし、外国人の役に立ちたいと思っている。

A: 家族が外国籍の方と結婚し、現在、その家族に日本語を教えている。

A: 海外の在住経験がある。自分が海外で助けてもらった分、日本にいる外国人の役に立ちたいと思った。

A: 大学で日本語教師養成課程を受講している。

A: 交流の場を求めた。青年海外協力隊でタイに派遣された経験があり、日本語教師に興味がある。現在は福祉の仕事に携わっているが、マイノリティとの共生などの考え方を学べることに期待している。

Q：日本語教室についてどう思うか。また、日本語パートナーとして参加する前と後で自身の考え方に変化があったか。

A：講師の先生方は専門性が非常に高いと感じる。

A：ひらがな表を見ながら懸命に学ぶ学習者の姿を見て感動している。

笑顔が見られたときは本当にうれしい。

A：言葉でコミュニケーションできれば気持ちも伝わると感じている。

A：宿題から学習者の頑張っている姿が窺え、素晴らしいと毎回心を打たれている。

A：日本語教室に初めて参加し、言語の難しさに直面している。

A：学習者が非常に集中して学習しているのが印象的。

A：教室で扱うテーマがいい。

A：様々な国籍の方がいるのもいい。

A：グループに分かれて学ぶので学習者同士の助け合いが見られる。それが学習効果として功を奏しているように思える。

A：皆さん、とても意欲的。

A：日本語パートナーの私たちの方こそ元気をもらっている。

A：私たちも勉強しながら意識を高めていっている。

A：「短いセンテンスでこんなに伝わるんだ」という学習者の声に驚いた。

A：「やさしい日本語」で声をかけるように気をつけている。

Q：どんなことばが「やさしい日本語」だと思うか。

A：「日本で暮らしているとわかって当たり前だろう」という考え方を捨てて言葉を選ぶ。

A：普段から接していないことばは使わない。

A：学習者の表情を見ながら、声かけをしている。わかったかわからないか表情で判断しつつ使うことばを選んでいく。

A：日本語を話すことに緊張している人はたくさんいると思う。やさしく声をかけてもらいたい。

②学習者支援で困っていることについて

Q：学習者支援する上で困っていることは

A：わかりやすいことばで理解してもらうことが難しい。

A：特に日本語レベルが低い学習者への声かけが難しい。

A：日本語を教えるのは本当に難しいことだと実感している。

A：自分の日本語を通して伝わることを考えると、こういった日本語を伝えればいいのか迷うときがある。

③その他

Q：これまでの教室を通じて運営の改善点は

A：様々な方がいる。話せるが読み書きが苦手な人が多いのでバランスのとれた日本語を教えていくことが大切だと思う。

A：生活者のためのカリキュラムがいいのでは。

A：日本の文化も伝えていかねばならないと思う。

A：会話では発音の練習もさせてあげたい。マスク着用なので口の動きを見せることができないのが残念。

A：ワークシートの例文が長い場合、どこできつたらいいかわからない学習者がいる。

A：例文にイントネーションの表示があるとありがたい。

A：例文のキーワードなどポイントになるところがはっきりとわかるといい。

A：抽象的な語彙は非常に教えにくい。

A：名札を忘れてくる学習者がいる。学習者の名前がわからなくて困ることがある。

3. 二市の座談会まとめ

①改善点に対する対応策について

すぐに対応できる事項については下記の通り対応し改善を図ることとした

ア ワークシート例文が長い場合についての対応策

- ・分かち書きすることばの単位を小さくした

イ 例文のキーワードなどポイントになる部分をはっきりさせるための対応策

- ・文型のポイントを色で表した
- ・文型のポイント部分やキーとなる例文を枠線で囲むようにした

ウ 抽象的な語彙についての対応策

- ・ワークシートに訳語を載せた
- ・パートナーの皆さんに辞書やスマートフォンの使用や紙に書くなど学習者に理解してもらう手段を提案した

エ 学習者の名前がわからないことについての対応策

- ・受付で名札をつけるよう声をかけることとした
- ・名札を忘れた学習者のためにシールタイプの名札を準備し受付で全員が名札をつけて入室することとした

その他は改善のハードルが高い内容、また、すぐに対応するのが困難な内容であったため、継続的に検討することとした。教室終了までに一つでも多くの改善点に対応できるようにしていきたい。

②座談会全体まとめ

- ・日本語パートナーが非常に好意的にかつ意欲的に取り組んでいることを相互に知る良い機会となった。また、パートナー同士が同じ想いで教室に参加していることを改めて確認できたことで横のつながりが強くなった。そのことが一層、教室での協力体制を強固にしスムーズな教室運営につながっている。
- ・日本語パートナーの意見から多くの改善点が見え、教材や教室運営に反映させたことで、学習者の利益につなげることができた。
- ・学習支援者として学習者にどのようなことばでどう伝えればいいかに迷いがある方が多いことがわかった。教室趣旨の理解、支援者に期待されている役割、在住外国人がおかれている現状、外国人が日本語を学ぶということ、やさしい日本語の考え方を伝える等、教室がスタートする前に学習支援者の勉強会を開催する必要性を認識した。
- ・日本語モデル教室における日本語パートナーは幅広い年代の方が参加しているが、パートナーの意見から積極的に日本語教室に携わっていることを実感した。本座談会を通して、学習支援者の必要性と、学習支援者が日本語教室に参加することが外国人住民と地域のつながりをつくる場となることを改めて認識した。